

## 読売新聞社賞 『風雪の寒梅』 青木 緋音

「真理は寒梅の似、敢えて風雪を侵して開く」新島襄の詩の言葉は彼の人生そのものである。彼は、国禁を侵して渡米する向学心を胸に、困難を一つ一つ乗り越え、自分の道を切り拓き、信念をもって、人々のために日本を変えていかねばならないと奔走した。その姿は、いまも彼の日記や書簡から熱をもって伝わってくる。特に、A.ハーディー夫妻にあてた手紙にある、友人より借りた「連邦志略」で見るアメリカに感銘を受け、日本もこうあるべきと自分の歩むべき道を定め、志を遂げんと邁進し続ける姿勢に勇気づけられた。

私の志も新島襄と同じく、一人ひとり、誰もが尊重され、自由に安心して幸せに暮らすことのできる社会の実現である。それは日本に限らず、世界のどこにいても基本的人権と平和が守られる社会を作ることである。

私は、中学2年の時、ベトナムを訪問し、ベトナム人の優しく温かい笑顔に触れた。高校に入り、連日、新聞やテレビで外国人労働者、外国人技能実習生の苛酷な労働環境が報じられていることに気づいた。その渦中にいたのは、あの温かい笑顔の彼ら、ベトナム人だった。人一倍勉強して希望を胸に日本に来た彼らが、苦しんでいる。自分にもできることはあるはずと考えた。折しもコロナ真っ只中、私は、彼らがこのコロナ禍をどう過ごしているか気にかかり、調べてみた。すると、外国人向けの健康に関する地元自治体のHPにベトナム語が無いことがわかった。これだと思った。私は、ベトナム人留学生と協力し、ベトナム語の問診票を作った。作成に当たり、ベトナム人留学生に問診票を作りたいと話すと、彼女は自分のことのように喜び賛同してくれた。この問診票が、一人でも多くの日本で働くベトナム人労働者、技能実習生に届いてほしいという一つの志が私たちを結んでいた。彼女は私の拙いベトナム語の羅列を一つ一つ意味のあるものに変えていった。完成後、彼女がぼつりつつぶやいた「技能実習制度をなくしてほしい。」という言葉が忘れられない。今日、こうした留学生たちの声と日本社会の中から湧き上がってきたこの制度を問題視する声の高まりは社会の波となり、ついに国は外国人技能実習生制度の廃止へと動き出した。純粋に家族のために学びたい、働きたいという彼らの思いにつけ込んだ日本の醜悪な労働力搾取をいつまでも続けさせてはならない。私たちは、共に学び、共に働き、一人一人が社会の構成員として尊重されるべきである。今、日本は大きな分岐点にある。そして、私はその歴史が動く瞬間にいる。かつての新島襄のように、この瞬間、未来のために今、自分が何をすべきか常に考えて行動したい。志を同じくする仲間と共に学び、連帯し、進みたい。私のこの一歩は、まだ小さなものにすぎない。一層の勉強も必要だ。風雪に敢えて開く寒梅、新島襄のように初心を貫き、向上心を忘れず、周囲と協力し困難を乗り越え、大きな時代の流れを作る存在になりたい。